

# CASTEL/Jを利用した機能語の出現頻度調査

鈴木庸子

## 要 旨

日本語教育支援システム研究会作成の日本語教育用データベースCASTEL/Jが所収する8種類の文章85万字を対象に、機能語384項目の用例を検索し、そのデータをもとに文章中の出現頻度が高い項目、低い項目を明らかにした。そして、中級日本語教育のための教材作成にあたって機能語を選択する場合に、1) 中級前期に計画的に導入することが望ましいもの、2) 読解教材などの中で出会った順に提示されればよいもの、3) 口頭表現として扱うことが適切なものという分類を提案した。また選択にあたっての留意点について考察した。

[キーワード] 中級日本語教育、機能語、中級文型、頻度調査、CASTEL/J

## 1. 研究の背景

中級レベルの日本語教育において、「～につれて」「～だけあって」「けして～ない」などの語の教育が行われる。本稿では、これらの語を『日本語能力検定試験シラバス』の用語に従い「機能語」と呼ぶことにする。

これらの語は、「表現文型」(『中級表現文型』1983、『どんなときどう使う日本語表現文型500』1996)、「中級文型」(来嶋他、1994)、「機能的語句」(『日本語教育ハンドブック』p415)などの名称でも呼ばれてきたもので、中級レベルの日本語教育にあたって明らかに重要な学習内容である。しかし楠本他(1993)の調査で明らかのように中級教材や中級教科書によって共通して扱われる項目が非常に少なく、何が学習すべき「機能語」なのか、どのような順序で学習するのがよいのか確定したシラバスがないといつてよい。

この理由は「機能語」を学習項目として選択するときに、主に読解教材に出てくるものを「出会った順」に取り上げることが多いためだと思われる。しかし、この「出会った順」方式には次のような問題点がある。

- 1) 重要な語が学習内容からもれて、あまり重要でない語が扱われることがある。
- 2) 難しいものが先に導入され、後からやさしいものが導入されることがある。
- 3) 語の体系性が考慮されない。

「3) 語の体系性」とは、同義のもの、反義のもの、話し言葉と書き言葉の別、機能による分類などを指す。

さて上記のような問題を避けて学習者の負担を軽くし、効率良く学習を進めるためには、「重要でやさしいものから体系を考慮して導入」すれば良いことになる。そのためには次

の点を明らかにする必要がある。

- 1) 重要な項目は何か
- 2) やさしい項目は何か
- 3) 語の体系はどのようになっているか

そのうえで、これらの項目が計画的に導入できるような読解教材を開発したり、読解教材を使わずに「機能語」のみを学習していく教材を作ることが可能になる。

本稿では、上記の「1) 重要な項目は何か」という問題に焦点を絞ることにする。また重要度の指標は頻度の面と言語学の面の両面からとらえる必要があるが本稿では頻度に注目することにする。

## 2. 研究の目的

この論文の目的は、電子化された約85万字の文章を対象として、そこで用いられている「機能語」の出現頻度調査を行い、その様相を明らかにすることである。前節で述べたように「機能語」の学習をより効率的に進めるためにはその重要度を明らかにすることが必要である。そして、頻度は重要度のひとつの指標となるからである。

さらにこの論文では、調査の結果に基づいて、中級レベルの日本語教育で扱うべき学習項目と学習順序に関して、考察したいと思う。

## 3. 調査

### 3-1 先行研究

「機能語」あるいは「中級文型」の頻度などに関する研究として来嶋他（1994）、鈴木（1998）、横田他（1998）による調査がある。来嶋他（1994）の調査は、14冊の中級教科書で扱われている「機能語」を比較して重なりを調べ、重なりの多いものからA,B,C,D,Eのランク付けを試みたものである。鈴木（1998）は、文化庁の策定した文法標準表（『外国人に対する日本語教育の振興に関する報告集』1983）から選定した語句について、自作の読解教材『新書ライブラリー』に出現する頻度を調査している。横田他（1998）は、『中・上級社会科学系読解教材テキストバンク』で読解教材から学習のために抽出した語句（文型）と、日本語能力試験の出題基準であげられている「機能語」を比較検討し、両者の重なりの様相を報告している。

### 3-2 調査の方法

#### 1) 頻度を調査した「機能語」

この論文で頻度を調査した項目は『日本語能力試験出題基準』に掲載されている機能語サンプルリストうちの2級の語である。ただし、このリストでは「～として」「～として

も」「～としては」などを同一の項目として扱っているので調査にあたってはそれぞれを別の項目としてたてた。また同形異義のものも別の項目に分けて、合計384項目とした。

## 2) 調査対象「CASTEL/J」

調査対象とした文章は、日本語教育支援システム研究会が作成した日本語教育研究用のデータベース、CASTEL/Jに収録されているデータの中から、次の8種類の文章を選んだ(注1)。全体で85万6015文字となった。

- ・『日本の企業発展史』下川浩一、1990、講談社
- ・『北日本新聞』北日本新聞、1993、北日本新聞より133,370字
- ・『新しい社会 公民』川田侃、尾藤正英、田邊裕ほか33名、1993、東京書籍
- ・『平成4年版国民生活白書』経済企画庁編、1992、大蔵省印刷局
- ・『二十世紀の世界』今津晃、1974、講談社
- ・『人体の不思議』吉岡郁夫、1986、講談社
- ・『新しい社会 地理』川田侃、尾藤正英、田邊裕ほか33名、1993、東京書籍
- ・『わが国の文教施策』文部省、1993、文部省

## 3) ツール「Nippongo Analiser」

頻度の調査には「Nippongo Analiser」(注2)の中の「Kotoba」というプログラムを使用した。プログラムの基本はKWIC(key word in context:キーワードによる用例検索)であるが、複数のキーワードを一括して処理することができるようになっている。

## 4) 分析の視点

頻度調査の結果について、分析の視点は次の3点である。

- a. 全体像としてどのような様相を示すかを調べる。  
どのような機能語がどの程度の頻度で用いられているか、頻度の高いものと低いものがどのように散らばっているかを調べる。
- b. 「機能語」のタイプ、ランクと頻度の関係を示す。  
鈴木(1998)では、文化庁の文法標準表をもとに、中級レベル以上で学習する文法事項(本稿の用語では機能語)を便宜的に次のように分類した。「従属句をつくるもの」「語や文を接続することば」「陳述副詞」「格助詞相当連語」「形式名詞」である。今回の調査でもこの分類を利用し各タイプごとに頻度を示し特徴を調べる。  
また、来嶋ほか(1994)で提示されている機能語の重要度のランク「A、B、C、D、E」とこの調査の頻度との関係を明らかにする。
- c. 「は、も、の」などが付いた形態のバリエーション別に頻度を比較する。  
「～として」に対する「～としても」「～としては」、「～に関して」と「～に関する」のようなバリエーションのあるものについて、形式別の頻度を比較する。

### 3-3 結 果

#### 3-3-1 「機能語」の出現頻度の全体像

「機能語」として項目にたてた384語の頻度調査の結果を「出現頻度」と呼ぶことにする。たとえば、「～として」という項目は、調査の結果8冊の本の中で811回使われていることがわかった。この場合「として」の出現頻度は811である、と表現する。出現頻度について調査の結果を次に述べる。

まず、出現頻度の高い項目は少なく、出現頻度の低い項目は多い。出現頻度の高い順に項目数を数えて見ると頻度が100以上の項目は、25項目、10から99までの項目は107項目、頻度が2から9までの項目も106項目、頻度1の項目は30、頻度0の項目は116項目であった。出現の比率をグラフで示すと図1のようになる。つまり、出現頻度が10以上の項目は全体の34.3%、約3分の1であり、まったく使われなかった項目と1回しか使われなかった項目を合わせると38%でやはりおよそ3分の1となる。

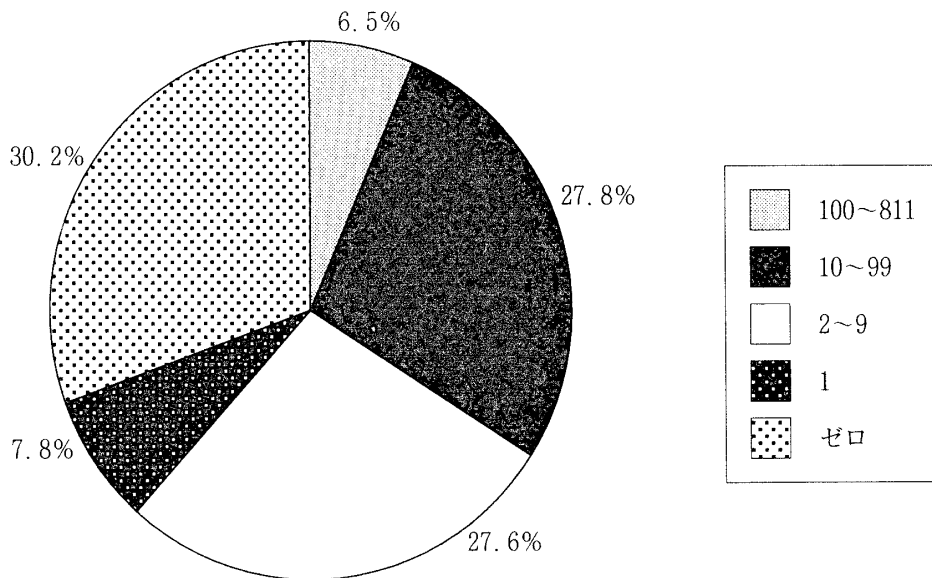


図1 出現頻度別 項目数 (率)

頻度の上から重要度を推測するとすると、出現頻度10以上の項目については「書き言葉における高頻度の「機能語」と考えてよいだろう。逆に頻度0または1の項目は、今回調査したようなタイプの文章においては頻度の低い「機能語」と言える。

#### 3-3-2 格助詞相当連語、従属句を作るもの、接続語、形式名詞などの分類

「機能語サンプル」のリストにある項目を「文法標準表」を基にした鈴木（1998）の分類に沿って分類し、出現頻度ごとにまとめた（表1）。

ただし、鈴木（1998）で使用した分類は「従属句を作る」「語や文の接続」「陳述副詞」

「格助詞相当連語」「形式名詞」である。『日本語能力試験出題基準』の「機能語サンプル」リストには「陳述副詞」(もし、おそらく、はたして、など)は含まれていないため、この項目は省略した。また、「語や文の接続」も項目数が少ないため表からは省いた。語と語をつなぐ接続語は「とか」「やら～やら」の二つで、ともに出現頻度はゼロであった。文と文をつなぐ接続語は「このように」(出現頻度100以上)、「以上のように」(出現頻度10以上)、「次のように」(出現頻度2以上)など、前置きのことばの頻度が高いことがわかった。そのほかの文をつなぐ接続語で「機能語サンプル」にあがっているものは「一方」(出現頻度10以上)であった。

鈴木(1998)で分類項目としてたてなかった「活用語」(～まい、など)は、ここでは項目を立てた。さらに分類項目としてあてはまらないものを「そのほか」とした。主に助詞が含まれる。形式名詞の項目には、文末にあってムードの表現にかかわるものもここに分類した。

なお、「従属句を作るもの」「格助詞相当連語」の項目では、助詞の付加や活用の変化によるバリエーションは一括し、もっとも一般的な形式で代表させた。

表1 頻度順機能語リスト1 タイプ別

( )の中は意味を示す

出現頻度	従属句を作る	格助詞相当連語	形式名詞など	活用語	そのほか
100～	とともに(同時に)によって(原因手段) うえ によると ～を～として	として について によって(受身) における において に対する に関する を中心に を通じて	べき Nのように(比況) ようになる		
10～99	上で ことから つつ もの ながら(逆説) 際 ように(目的/命令) 一方 たところ によれば ばかりでなく とおり うちに に際して にもかかわらず といっても にせよ のみならず	にとつて に伴って をはじめ とともに(につれて、一緒に) に応じて にわたって のもとで にこたえて に基づいて によって(場合) から～にかけて につれて に対して をめぐって にくらべて に加えて を契機に	わけではない ように(推量) Vのように(比況) ことはない ものだ ようにする ことになっている  向けだ にすぎない	うる まい	どのように ぐらい くらい こそ だけ さえ など しかない ほどの

出現頻度	従属句を作る	格助詞相当連語	形式名詞など	活用語	そのほか
10~99 (前ページ より続く)	とすれば ことなく はもとより といえ 反面 一方で て以来 としても 最中に	に関して を通して に伴って にそって に応じて をもとに			
2~9	というより かないかのうちに をきっかけに たとえ~でも につき どころか を問わず おかげで 以上 にしろ に限らず にしても ばかりか はもちろん からみれば かわりに きり はともかく あまり からすると からといって からすれば と思ったら に際して にかかわらず からといって という せいか どおりに としたら につけ くせに から見ると せいで とたんに たびに (ない) かぎり ところを にかぎって 思うように	にあたって に先だって に反して にかわって につれて をこめて	にちがいない ものがある わけにはいかない ということだ べきではない ようがない おそれがある こととなっている というものではない わけだ ものか わけにもいかない どころではない 一方だ がちだ ぎみだ というものでもない 向きだ ほかはない にほかならない かねる	ざるをえ ない きれない がたい まいか げ	でさえ なんて
1	にしては あげく からして たび といったように の末 わりに ことに にもせよ		てしかたがない てならない ほかない ように(願い) わけでもない	ぬく っほい	なんか

出現頻度	従属句を作る	格助詞相当連語	形式名詞など	活用語	そのほか
0	にしたら といったら てからでない とをぬきに ぬきで にかかわりなく もかまわず ものなら ほど ば～ほど かぎり かとおもうと からは からみて きり くらい ことだから 次第 だけあって 末 ついでに てからでなければ ぬきで とおもうと とおりに どころではなく にすれば ばかりに はとわず ～も～なら～も ～も～ば～も ものだから	にこたえて	てたまらない ほかしかたがない というものだ わけはない ことだ ことか よりほかはない しようじゃないか がち つけ っこない てしょうがない ないことはない ないではいられない に相違ない もの ずにいられない ようもない に決まっている	かけだ きる	さえ～ば

表1を見ると、「格助詞相当連語」は一般的に出現頻度が高いこと、「従属句を作るもの」は、「機能語」項目数が多く、頻度の高いものから低いものまであること、「形式名詞」などでは、本来の形式名詞の出現頻度が高く、また活用や表現のバリエーションも多いことがわかる。

### 3-3-3 来嶋らによるABCDEランクとの比較

今回の調査の結果に来嶋他(1994)で述べているランクを重ねてみると表2のようになる。ただし、来嶋他(1994)でとりあげている項目は、14冊の中級教科書で学習項目としてとりあげている「機能語」(来嶋らの用語では「中級文型」と呼んでいる)、『中・上級日本語教科書文型索引』の項目、日本語教育学会がまとめた「中級日本語表現型」の項目の中の、文中に現れる表現である。そのため、本稿で調査する「機能語」のリストに含まれない項目やその逆の項目があるが、ここでは重なる項目に関して対応を調べた。また、助詞の「の、は、も」がついた形、連体形と連用形のバリエーションなどは一括し、表には出現頻度の多い形を載せた。

なお、ランクの判定は次のようになっている(来嶋他、1994、pp.15-16)

Aランク：14冊の中級教科書ほかでとりあげられている件数が6件以上

Bランク：同4-5件

Cランク：同3件

Dランク：同2件

Eランク：同1件のみ

表2 頻度順機能語リスト2 ランク別

出現頻度	Aランク	Bランク	Cランク	Dランク	Eランク
100～	によって（原因手段）	として について に対して	とともに（同時に） において を中心に を通じて	に関する	における 上（じょう） によると
10～99	にとつて をはじめ ながら（逆説） ほど によって（場合） から～にかけて につれて たところ うちに といつても	上（うえ） もの ぐらい／くらい こそ に基づいて だけに 一方 だけの さえ ばかりでなく とおり しかない 反面	ことから とともに（につれて、と一 緒に） にわたつて をめぐつて にせよ といえ ばもとに	つつ に伴つて に応じて 際 のもとで に比べて を通して に沿つて ように（命令）	からは だけ ように（比況） によれば に加えて のもとに に関して に際して のみならず
2～9	たとえ～でも 以上 ないかぎり	どおり おかげで にあつて かわりに はもちろん からといつて わけだ がちだ ことには にしたがつて	をきつかけに にしろ というより なんて という たびに ところを		どころか にしても ばかりか にかわつて に限つて
1				あげく なんか わりに	からいえ ばにしては
0	かぎり さえ～ば ば～ほど ほどだ	ことに だけあつて とか も～ば～も～	ことだから といつたら も～なら～も ～ やら～やら を中心にして をもつにして	次第 に応じて ばかりに	と思つと からには ついでに はともかく として



表2をみると、中級教科書などで扱われる項目の共通性をもとに設定したA～Eのランクは、今回調査した8冊の文章の中での出現頻度と関連がないように見える。少なくともAランクまたはBランクの項目は、出現頻度が低くても何らかの理由で重要度が高いと考えられるものである。なぜ、8冊の文章の中での出現頻度が低いのかは、個別に考察する必要があるだろう。

### 3-3-4 助詞の付加などによるバリエーション

「機能語サンプル」のリストでは「として、としては、としても、としての」などの格助詞相当連語は1項目としてまとめてあるが、出現頻度の調査ではそれぞれを別個に扱った。これらのバリエーション別に、助詞相当連語の出現頻度をまとめてみると、表3のようになる。

この結果を見ると、頻度の非常に高い「～として」「において」「に対して」「について」はバリエーションも多いことがわかる。

表3 助詞相当連語のバリエーション別 出現頻度

(ブランクのセルは機能語のリストに項目がなかったもの。「0」と記してあるセルは、調査の結果1度も出現していないことがわかったもの。)

見出し	～て	～ては	～ても	～ての	連体形	連用中止形	～た
として	811	98	11				
にあたって	6					1	
において	300	189	106		466		
に応じて	46	0	0			14	50
に応じて(こたえて)	10	0	0			1	3
に限って	2					2	
にかけて		0	0				
にかわって	3					1	
に関して	22	24	5		291		
に比べて	38					29	
に加えて	26					21	
にこたえて	0				0	42	
に際して	18			2		4	
に先立って	6				0	0	
にしたがって	2					0	
に沿って	15				2	2	11
に対して	180	31	17		297	136	
について	599	323	98	76		8	
につけて		0	0			2	
につれて	36					3	
にとって	87	25	5	8			
にともなって	20				69	73	

見出し	～て	～ては	～ても	～ての	連体形	連用中止形	～た
に反して	3				0	2	0
に基づいて	36				42	36	7
によって(原因手段)	360					298	
によって(場合)	39					9	
によって(受身)	98					14	
にわたって	49				38	29	2
を通じて	108						
を通して	22						
をめぐって	23				31		

\* 「～において」の連体形は「～における」をあててある。

次に「名詞+助詞」のバリエーションを調べて見ると表4のようになった。

表4 「名詞+助詞」のバリエーション

名詞の語		+は	+も	+に	+で	+の	そのほか
以上	6	2					
一方	31				7		
うえ	15			4			一方では11
上		0			90	2	
上で		4	8			8	
かぎり	0	0			0		
際	48	1		15			
上(じょう)	136	4	1				
だけ	40			36		28	
たび	1			2			
せい	せいか 3				2		+だ 0
つつ	75		14				
とおり	21			0			
どおり	9			3			
ところ	ところを 2			0			
末	1			0		0	
のもと				25	48		
ほど	56					10	
むき				0		0	+だ 2
向け				0		0	+だ 19
わり				1			

次に、「～をきっかけに」と「～をきっかけにして」のように「して」を加えたバリエーションを見ると、表5のようになった。「して」を加えたバリエーションの出現頻度は非常に低いことがわかる。

表5 「して」を加えたバリエーション

	頻度	「+(と)して」を加えたものの頻度
をきっかけに	9	1
をけいきに	25	0
を中心に	150	0
をはじめ	72	0
をもとに	10	0

#### 4. 考察

##### 4-1 機能語の分類と重要な項目の選択

本研究では、ごく限られた量ではあるがある文章を対象として機能語の出現頻度を調査し、その様相を明らかにしようとした。その結果から中級で導入する場合に重要なものを抽出したいと考えたからである。

この調査の結果から、機能語は次のような観点で分類できるのではないと思われる。

- 1) 中級前半で計画的に教えるとよい項目（非常に頻度が高く、重要と判断できる項目）
- 2) 出会った順に教えていけばよい項目（頻度の低い数多くの項目）
- 3) 口頭表現として教えるとよい項目（頻度の低い項目に含まれている話し言葉）
  - 1) の計画的に教える項目とは、まず頻度100以上の次の17項目である。

～とともに、～によって（原因、手段、場合）、～うえ、～によると、～を～とする  
 ～として、～について、～における、～において、～に対する、～に関する、  
 ～を中心に、～を通じて、べき、～ようになる

次に出現頻度10～99の項目130から、来嶋らのランク付け、文法的重要性（活用語の「～まい」、助詞は優先する、など）を参考に1項目ずつ検討して、必要な数を選ぶのがよいと思われる。たとえば、来嶋らのAおよびBランクと重なり、頻度10～99の語句は次の2項目である。

～にとって、～をはじめ、～ながら（逆説）、ほど、～から～にかけて、～につれて  
 ～たところ、～うちに、～といっても、～上（うえ）、～ものの、～ぐらい、こそ、  
 ～に基づいて、～だけに、一方、～だけの、～さえ、～ばかりでなく、～とお  
 ～しかない、～反面

このような方法で、重要度の高い語句を順番に選択していくことが可能だと思われる。その後、選択からもれた語句については2) の出会った順に教える項目として扱えばよいと思われる。

4) に挙げた、口頭表現として教える項目とは、「つけ」「～っぽい」など話し言葉で使われるものである。今回の頻度調査では頻度0としてカウントされているものの中に、このような話し言葉が含まれている（表5に、筆者が「話し言葉」と判断した項目を挙げる）。調査対象とした文章の性格上当然の結果だが、これらの語句に関しては、重要度の判断や導入の順序について別の調査研究が必要である。また、教える際には口頭表現として適切な文脈で提示されるべきであろう。

表5 口頭表現と考えられるもの

わりに、～ことに、～にもせよ、～ように（願い）、～てしかたがない ～ほかない、～っぽい、なんか、～ものなら、～ものだから、～てたまらない ～ことだ、～ことか、がち、つけ、っこない、～てしょうがない、しょうじゃないか ～もの、～ようもない、～に決まっている、～ばかりに
------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

#### 4-2 学習項目の選択にあたっての留意点

機能語の頻度調査の結果をもとに、重要な語句の選択について考察してきたがもう2点、選択にあたって留意する点を指摘したい。

まず第一は形態にバリエーションのあるものの導入に関してである。導入の効率化、体系的な導入のため、「として、としても、としては」などを同時に扱うことには意味がある。ただしその際にバリエーションを同じ比重で扱うのではなく、重要性の差や文構造の差、ニュアンスの差に注意を払うことが必要である。

第二は、同形異義の語句の導入に関してである。「ように」、「対して」、「応じて」、「よって」などの語句は複数の意義をもち、それぞれの頻度も高い。教育上配慮の必要な語といえるだろう。又「～ように」「～よって」は初級文型とも重なる部分があり、その点からも配慮が必要である。特に「～によって」「～により」「～によると」「～による～」といった形の似ているものがあり、注意が必要である。

#### 4-3 頻度0の項目について

次に頻度0の項目について考察したい。頻度0の項目の中には、前節で述べたように話し言葉でのみ使われるもの（「つけ」、「っこない」）などがあるが、もう一つ、書き手の主観をつよく表すもの（「～ようもない」「～ずにいられない」）が多く含まれている。

これらは小説、エッセイなどの中で使われるものではないかと思われる。今回調査対象とした説明的な文章の中では、話し言葉と同様に出現するはずのないものである。したがってこれらの語について、教育上の重要性は今回の調査からは把握することが不可能で、別の判断基準を設けることが必要である。表6に、頻度0で、主観的な表現と考えられるものを挙げる。

表6 頻度0で主観的な表現と考えられるもの

～にしたら、～といたら、～もかまわず、～ものなら、  
～ことだから、～だけあって、～どころではなく、～にすれば、～ばかりに  
～も～なら～も～、～も～ば～も～、～ものだから、～てたまらない  
～ほかしかたがない、～というものだ、～わけではない、～ことか、～ことだ  
～よりほかはない、～がち、～ないことはない、～ないではいられない、  
～ずにいられない

#### 4-4 機能語サンプルリストにないもの

最後に「日本語能力試験出題基準」の機能語サンプルリストには扱われていないが重要となるのではないかと思われる語句についてふれる。ICU中級教科書試用版で「構文・表現」の名称で学習項目として「出会った順」に拾った語句の中には「機能語サンプルリスト」にないものがある。表7にその例をあげる。これらの項目は、初級の文法事項をより長い文や複雑な文のなかでとりあげたもの、初級で扱いきれなかった文型、文章の展開を示すために使われる接続の語、陳述副詞などである。これらは、機能語サンプルのリストと関係なく、重要な項目である。

そこで、中級の学習項目の選択にあたっては、「機能語サンプルリスト」を絶対視するのではなく、ひとつの基準として用い、そのほかにも重要なものに「出会った」ら学習語句としてとりあげる柔軟性と判断を忘れてはならないと思う。

表7 機能語サンプルリストになかった項目の例

～と～、～ては～、お礼に、動詞の中止用法、～という～、～すぎて～きれない  
～ことがある、Vもしないで、～のためか、どうしても～たい、なにか～もの  
～と同時に、どれほど～か、よく～ように、～点では、～傾向がある、

～ば～ことになる、前者・後者、さて、いかなる～といえども、～すら  
いったん～ばあい、かならずしも～ない、～のが聞こえる、～ところが、  
～てからというものの、～なくてすむ、～やいなや、まして、まさか～ない  
せいぜい、～かなと思ったら～てください、なんと（たくさん）  
ただ、VでのN（考えての結果）、自分、～ず、そのうえ、そこで、  
以上の結果を見ると～ことがわかる、～とはいっても、～ては～ていた  
ひとつも～ことなく、一見～ようだが考えようによっては、～という。  
結局、～というの～なものである、とにかく、～と思えば～、  
～するのなら何と言っても～、～するには～するだけの理由がある  
そんなことはいつていられなくなった、～たいものだ、あらためて～に気づく  
とはいえ、したがって

## 5. 今後の課題

今回の調査は、学習項目の体系化に向けての一つの試みであり、第一歩にすぎない。また機能語のタイプ別の分類も文法理論の面からは粗いものとなっている。また、先にも述べたように、対象とした文章の性格による調査結果の制限もある。今後は、文法理論、別のタイプの文章での頻度、話し言葉など別の角度から語句の重要度を策定することが必要であると思われる。先輩諸氏のご指導を仰ぎたい。

最後に、頻度のカウントにあたって3ヶ月にわたり根気良く作業をしていただいた国際基督教大学大学院生の畑中千晶さん、秋澤委太郎さん、川窪陽子さん、隈井正三さん、武田恵理子さんに感謝の意を表します。

## 注

- 1 CASTEL/J (Computer Assisted System for TEaching & Learning/Japanese) は、日本語教育用に開発されたデータベースで、辞書、新書、白書、教科書、画像、音声などがデジタルデータとして収録されている。くわしくは、及川 (1997) を参照のこと。
- 2 「Nippongo Analiser」：日本語教育用に作成された言語分析用のプログラム。作成者は国際基督教大学教授石本菅生。詳しくは鈴木 (1998) 「日本語学習者を対象とした読書支援システムの開発 研究成果報告書」を参照のこと。

## 参考文献

- 及川昭文 (1997) 日本語教育支援データベース流通促進のための総合的研究 文部省科学研究費補助金基盤研究 (A) 研究成果報告書 研究代表者 及川昭文
- 来嶋洋美、梁島史恵、楠本はるみ、荘由木子、福谷正子 (1994) 中級文型の格付けの試み ー既刊教科書における頻度調査に基づいてー、『日本語国際センター紀要』第4号pp.13 - 34
- 楠本はるみ、来嶋洋美、荘由木子、梁島史恵 (1993) 中級日本語に関する調査 ー読解を中心にー 『日本語教育方法研究会誌』 Vol.1, No.2, pp.12-13
- 国際交流基金・財団法人日本国際教育協会 (1994) 『日本語能力試験出題基準』
- 鈴木庸子 (1998a) 日本語学習者を対象とした読書支援システムの開発 『人文科学とコンピュータ 文部省科学研究費補助金 重点領域研究 1997年度研究成果報告書』研究代表者 及川昭文 CD-ROM版
- 鈴木庸子 (1998b) 上級日本語読解教材「新書ライブラリー」の表現調査、『人文科学とコンピュータ38-9』 pp.87-94
- 文化庁文化語部国語課 (1983) 外国人に対する日本語教育の振興に関する報告集
- 横田淳子、田山のりこ、土屋順一、藤村知子、今村大介 (1998) 「社会科学系留学生の大学での勉学に必要な日本語能力 ーテキスト読解のための文型ー」『日本語教育学会春季大会 予稿集』 社団法人日本語教育学会 pp.129-134